

テーマパネル4

あさ うみ へいげん
浅い海から平原にその2
常設展示室

炭田が発達するためには、長期間にわたって大量の陸生・水生の植物が繁茂し、それが水中に堆積し、埋没後、続成作用を受ける必要があります。

この頃の古オホーツク海は、マンガン団塊を含む深海底堆積物を堆積するような深海域の環境でしたが、西側の大陸とオホーツク古陸が接近することによりその環境は次第に浅海域のものになってきたと考えられています。

そして、双方の陸地が徐々に狭まっていくことにより、古オホーツク海はやがて消滅することになります。それは、北方の樺太付近の海域で早い時期に起こり、北海道周辺では、それに遅れて進行していったと考えられています。

この東西2つの沈み込みの収束は、古第三紀暁新世の頃、約5,500万年前にはすべて終了したであろうと推定されています。またその頃、北海道周辺では太平洋プレートが沈み込みを開始し、新たな島弧-海溝系を形成していきました。

その後古陸は大陸へ最接近し、残された東西の前弧海盆地は炭田を形成するような低地へと変化していきました。炭田の形成は、東西島弧群が衝突をする前触れでもあったのでした。

(地質学・岩石学担当学芸員 向井正幸)